

教育目標

「確かな学力，豊かな心，健やかな体」を身に付け，次代を生き抜く子どもの育成」
—郷土を愛する子どもを地域とともに育てる—

年度末の最終評価

自己評価

教育目標の達成状況，次年度に向けた見直し

- ・「確かな学力」の育成について，「花背の特性をいかし，主体的・対話的に深く学び続ける子どもの育成」についての授業研究が進み，どの教科・領域でも児童生徒の学びを中心とした授業を実践することができた。一方で，児童生徒が自ら課題を見つけて取り組んでいく家庭学習の指導については，引き続き改善の余地がある。そのためにも，アンケート結果を見直し，新しい生活様式の中における家庭での過ごし方の実態を把握・分析しながら，有効な改善策を探っていきたい。
- ・「豊かな心」の育成については，道德の授業や教職員の日々の細やかな関わりを通して，児童生徒1人1人を大切にし合える教育を実践することができた。しかし今年度も，児童生徒の自己有用感の育成に大きくつながる学校行事や様々な取組があまり実施できなかったため，次年度は児童生徒の活躍の場を積極的に作り，互いを認め合える人間関係づくりに取り組むことで，自信を持って成長していけるようにしていく必要がある。
- ・「健やかな体」の育成については，何よりも新型コロナウイルス感染症の対策を引き続き十分に，そしてきめ細やかに取り組んでいく必要がある。また，新型コロナウイルス感染拡大が長引く中，思うように学校生活を送れていない児童生徒に対して，このような状況下でも体力づくりにつながるよう日々の休み時間の過ごし方やタブレット使用上の注意等の指導を続けていきたい。
- ・「郷土を愛する子どもを地域とともに育てる」ことについて，今年度も本校ならではの行事・取組や，地域とともに作り上げる教育活動がほとんど実施できなかった。本校独自の取組は，児童生徒の自信や地域愛につながる重要な経験である。次年度も感染症対策を十分に行うことを前提に，特色をいかした教育実践を計画していきたい。
- ・学校評価については，アンケート結果を見ての「感想」になりがちなので，具体的にポイントをしばって話し合ってもよいのではないかと考える。また，数字に出ない「コメント」などに対しても丁寧に目を通し，何らかの形で返答していくことも大切なことと考える。アンケートについても，アンケート項目に書かれてあることだけに囚われて評価されているように感じる部分があるので，それぞれの観点に対して，もっと広い視野で評価してもらうための方策を考える必要がある。次年度はこれらのこともふまえ，より実りのある学校評価を実施していきたい。

学校関係者評価

学校関係者による意見・支援策

- ・「確かな学力」，「健やかな体」については，補足資料があると，さらに分析を深めることができるのではないかと考える。
- ・地域を理解し，地域を愛する教職員であってほしい。そのために，「地域の先生」を利用してほしい。
- ・スキー学習については，地域を利用して，可能な限り実施を追求してほしい。

(1)「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標

義務教育学校として9年間を見通した小中一貫カリキュラムのもと、各学年・期における「重点化する学習内容」を明確にすることにより、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、それを「活用する力」や「学ぼうとする意欲」「学び続ける力」を身に付けさせていく。

具体的な取組

- ・前期課程と後期課程の円滑な接続を意識した学習内容の重点化を図り、各学年で指導すべき基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる。
- ・義務教育学校としての特性を活かし、社会、理科、体育科をはじめとする各教科で、内容の系統性や前期課程と後期課程の学習の円滑な接続を踏まえるなど、校種間連携を密にした指導内容の充実を図る。
- ・少人数校の特性を活かし、一人一人の子どもの学力を最大限に伸ばすきめ細やかな指導を行うとともに、学びに向かう力の伸長のため、家庭学習・自学自習の習慣を身に付けさせる。
- ・「小中一貫学習支援プログラム」において、義務教育学校及び少人数校であることの顕著な成果を出す。さらに、個別の学習カルテに基づいた「学力実態分析研修」により取組の進捗状況を全員で共有し以降の指導に活かすなど、「指導と評価の一体化」の充実を図る。
- ・「個に応じ個を育てる」指導の徹底、特に各学年の学習内容・学習実態の分析から、教材配列の工夫や指導法を研究開発し、確かな学力を身に付けさせ、一人一人の個性や能力の伸長を図る。
- ・計画的な学校図書館利用による、主体的・意欲的な学習活動や読書活動の充実を図る。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・全国学力・学習状況調査、研究会テスト、プレジョイ、ジョイントプログラム、学習確認プログラムの分析結果。
- ・児童生徒の話す・聞く態度や学習態度の変容。
- ・家庭学習での成果物の点検結果。
- ・校内研究授業等を通じた学びの検証。
- ・授業参観、家庭訪問、懇談会等の際の保護者の意見。
- ・児童生徒、教職員及び保護者アンケートの結果。

該当項目…自分から積極的に授業に取り組んでいる。(児生・教・保)

学習したことは自分の力になっている。(児生・教・保)

めあてをもって自分から家庭学習に取り組んでいる。(児生・教・保)

朝読書の時間以外にも読書に取り組んでいる。(児生・教・保)

※児童生徒は自己の取組について振り返り評価し、教師は児童生徒に対する指導度・実現度について評価し、保護者は子の様子について評価する。

最終評価

(中間評価時に設定した) 各種指標結果

※学校評価アンケートの集計においては、児童生徒アンケート(自己評価)、保護者アンケート(一人一人の子の様子の評価)、教職員アンケート(指導度と実現度の自己評価)について、「よくできている(4)」「だいたいできている(3)」「あまりできていない(2)」「できていない(1)」の平均値を4点満点で算出した。

- ・児童生徒アンケートでは、「①自分から積極的に授業に取り組んでいる。」「②学んだことがしっかりと身についている。」の2つの項目で、第1回と比べ第2回の全校平均が上がった。
- ・教職員アンケートでも、「①-1 児童生徒が学習活動に満足感や達成感を持つように指導している。」

	<p>「②-1 めあてを提示ながら主体的に学習できるように工夫しながら指導している。」の2つの項目で、実現度の平均値が高くなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒アンケートでは、「③自分から家庭学習に取り組んでいる。」「④家でも積極的に読書をしている。」の2つの項目で、第1回と比べ第2回の全校平均が下がった。 ・保護者アンケートでも、「③自分から家庭学習に取り組んでいる。」「④家でも積極的に読書をしている。」の2つの項目の平均値が低くなった。
自己評価	<p>分析（成果○と課題▼）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>▼家庭での学習と読書については、平均すると数値が下がっているように見えるが、児童生徒が成長とともに「よくできる」評価から、自分を客観的に見て「大体できる」にしていることが考えられる。また、「あまりできない」「できていない」を選択していると考えられる児童生徒が同じだと考えられるので、その対応に目を向けるべきではないか。</p> <p>▼家庭での読書は、帰宅してからなかなか時間的に確保するのが難しいのではないか。</p> <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あまりできない」「できていない」を選択している児童生徒への対応の仕方を考える。 <ol style="list-style-type: none"> ①児童生徒の実態から、家庭学習をしてこない理由を考える（面倒くさいのか、わからないのか、家庭環境的にできないのか、勉強嫌いなのか、教師の指導に対する反発かなど）。 ②選択できるような家庭学習の出し方を考える。 ③「小テスト」などを実施して、学習の範囲などを具体的に示す。 ④家庭学習の評価や小テストで良い点を取るなど、成功体験を持たせる。 ⑤自主学習で何をしたらよいか、理解させる。 ⑥学習指導部提案の「家庭学習の目安」を参考に9年生に向けて見通しをもち、勉強嫌いにさせないようにする。 ⑦やってこなかったから怒るのではなく、なぜやってこなかったのかを一緒に考える。 ・読書の楽しさを、家庭や教師が伝える。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生方の日々の取組の成果が、アンケートに現れてきていると思います。先生方のご努力に感謝します。 ・プライバシーに関わらない程度で卒業後の進路がわかると、「確かな学力」を分析する上でありがたい。 ・「①自分から積極的に授業に取り組んでいる。」「③自分から家庭学習に取り組んでいる。」の2つの項目に関して、Ⅱ期、Ⅲ期の評価が低くなっているのが気になる。特に、後期課程の宿題が大幅に減ることで、自分で計画を立てて勉強できる子どもでないと、しっかりとした学びにつながっていないように感じる。

（2）「豊かな心」の育成に向けて

重点目標

豊かな自然と伝統ある地域の中で、異年齢集団での学び合いを通して、道徳的実践力を育成する。

具体的な取組

- ・「豊かな心」の育成を目指した「心の教育」の充実を図るため、「道徳科」を要として道徳的価値の自覚を深め、あらゆる教育活動を通し人権意識を高め、互いを尊重し支え合い高め合う集団づくりを推進し、絆づくりを深める。
- ・緑豊かな美しい自然を活かした体験活動や地域教材を素材とする「花背学習」を充実させ、郷土の姿からの「学び」を通して生き方探究（キャリア）教育を実施し、「地域ぐるみ」で行う義務教育学校として特色ある教育活動を推進する。
- ・「花背学習」を通して地域の豊かな伝統や文化に触れさせ、豊かな感性・情操を育む。
- ・少人数校の特性である子ども同士や教職員との家庭的で温かな人間関係を土台としながら、あいさつや言葉遣い、学習規律や集団生活など、あらゆる場で大切となる人と人とのつながり、ルールや法の重要性を自覚できる取組を推進する。
- ・同一敷地内に隣接する保育施設の乳幼児との多様な触れ合いの場を設定し、豊かな心情を育む。
- ・9学年の異年齢集団による縦割り活動の取組を通して、自他の持つよさに気づき、互いに支え合い高め合う集団づくりを推進し、自己有用感の醸成を図る。
- ・スクールカウンセラーとの連携や定期的な教育相談の実施など、子どもの状況や学級実態を的確に把握するために常に多角的な視点を持って対応する。また、毎日の職朝時には児童生徒に関する情報交換を行うなど、全教職員の共通理解を図る取組を徹底する。

（取組結果を検証する）各種指標

- ・道徳の授業での自己評価等の記述内容
- ・児童生徒の話す・聞く態度や学習態度の変容。
- ・授業参観、家庭訪問、懇談会等の際の保護者の意見。
- ・児童生徒、教職員及び保護者アンケートの結果。
該当項目…あいさつやていねいな言葉遣いができている。（児生・教・保）
きまりを守って生活している。（児生・教・保）
友だちを大切にしている。（児生・教・保）
道徳の授業は自分の心の成長につながっている。（児生・教・保）
※児童生徒は自己の取組について振り返り評価し、教師は児童生徒に対する指導度・実現度について評価し、保護者は子の様子について評価する。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果

- ・児童生徒アンケートでは、「⑧道徳の授業が心の成長につながっている。」の項目で、第1回と比べ第2回の全校平均が上がった。
- ・教職員アンケートでも、「⑦-2 児童生徒が人権を大切に生活できるように指導している。」の項目で、実現度の平均値が高い。
- ・保護者アンケートでは、「⑤あいさつやていねいな言葉遣いができている。」の項目で、第1回と比べ第2回の「よくできている」が増えた。

自己評価

分析（成果○と課題▼）、重点目標の達成状況、次年度の課題

- 「あいさつ」については、数年前よりもするようになってきていると感じる。
- 道徳については、本校は各学年とも少人数なので、ノートのコメントやふりかえりなどを丁寧に見ることができる。

	<p>○道徳は、行事等の取組に合わせて内容を考えて授業をすると、とても効果がある。</p> <p>▼児生会の取組として「朝のあいさつ運動」ができれば良いのだが、全校一斉に登校（スクールバス）することもあり、実施が難しい。</p> <p>▼「豊かな心」に対しては現在４つの項目で評価しているが、教職員（と、できれば保護者も）はこの４つの項目だけで評価・分析をするのではなく、もっと広い視野で評価すべき。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「朝のあいさつ運動」のような、児童生徒が主体となって取り組む“目に見える活動”を考える。 ・アンケート項目に書かれてあることだけに囚われず、もっと広い視野で「豊かな心」に対して評価してもらうための方策を考える。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の中で、日々の取組が大変だと思います。校区の中でコロナ感染者が出るに至り、差別等がないか心配している。 ・児童生徒のアンケートでは、７月と１月の結果に学校全体でほとんど変化がなく、指導の成果が安定しているように感じる。保護者から辛口の点数が付けられているのは、学校と家庭での様子の差だと思う。

（３）「健やかな体」の育成に向けて

<p>重点目標</p> <p>９年間を見通した系統的かつ計画的な健康教育カリキュラムを通して、自らの健康や安全を管理するとともに、心身ともに健康で充実した生活を営もうとする力を身に付けさせる。</p>
<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな自然に囲まれている地域の特性を活かした行事や取組（遊びや運動、スポーツなど）のより一層の充実を図る。 ・義務教育学校の特性を活かし、校種間の接続及び発達の段階を意識した体育学習及び運動部活動指導により、生涯にわたって運動やスポーツに親しもうとする資質や能力を身に付けさせる。 ・子ども自らによる毎日の健康観察への取組を通して、望ましい生活習慣を自ら実践する力を育成する。 ・９年間を見通した性教育カリキュラムを通して、性に関する正しい理解と適切な行動選択ができる力を育てる。 ・「みんなのリビング」での異年齢集団による全校給食を通して、みんなと一緒に食べる喜びや楽しさを味わわせ、自ら進んで食べようとする気持ちを育てる。また、クラス別給食を通して各学年（年齢）に応じた食育指導を実施し、給食を「生きた教材」として食教育の充実を図る。 ・計画的な自転車安全教室や防災・避難訓練を通して、どのような場においても常に危険を予測し、自ら適切に判断し行動できる力を育成する。 ・薬物乱用防止教室、非行防止教室での学習を通して薬物や非行に対する認識を深める。
<p>（取組結果を検証する）各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康観察カードの点検

・新体力テストの分析結果

・授業参観，家庭訪問，懇談会等の際の保護者の意見。

・児童生徒，教職員及び保護者アンケートの結果。

該当項目…自分から積極的に運動している。(児生・教・保)

なんでもよく食べ，健康に過ごしている。(児生・教・保)

早寝早起きをしている。(児生・教・保)

※児童生徒は自己の取組について振り返り評価し，教師は児童生徒に対する指導度・実現度について評価し，保護者は子の様子について評価する。

最終評価

(中間評価時に設定した) 各種指標結果

- ・児童生徒アンケートでは，「⑪早寝早起きの習慣ができています。」の項目で，第1回と比べ第2回の全校平均が上がった。
- ・保護者アンケートでは，「⑨家でも積極的に体を動かしている。」の項目で，第1回と比べ第2回の「できていない」が増えた。
- ・教職員アンケートでは，「⑨-2 児童生徒が健康で体力のある体を作れるように指導している。」の項目で，第1回と比べ第2回の実現度の平均値が高くなった。

自己評価

分析(成果○と課題▼)，重点目標の達成状況，次年度の課題

○「冬休み明けアンケート」による生活チェック表やメディアの時間を見直す取組は，児童生徒のみならず，家庭にも子どもの実態を知ってもらう良いきっかけとなった。

○教職員の働きかけにより，休み時間に子どもはしっかりと体を動かして遊んでいる。

▼GIGA端末による影響もあるのか，視力の低下・運動量の低下が見られる。

▼コロナ感染拡大から，2学期以降は歯科検診が実施できなかった。

▼外遊びと早寝早起きは，学年が上がるほど難しいのではないかと(学年が上がるにつれ，メディアを使う時間が増加しているからではないか)。

▼歯磨きについては，アンケートでは「100%行っている」となっているが，結果が伴っていない。歯磨きの習慣は身に付いているが，磨き方が丁寧にできていないのではないかと。

分析を踏まえた取組の改善

・GIGA端末の使い方の指導を適宜行っていく。

・段階的なアウトメディア(メディアコントロール)の取組を行う。

・歯の磨き方指導を行う。「歯の染出し」は実施していきたい。

・「目で見て分かる」休み明けの生活改善として，よりよい活用方法を模索しながら今後も続けていく。

・しっかりと体を動かして遊ぶよう，引き続き働きかけていく。

・「～してはいけません」ではなく，「楽しみながら～」「～するといいよ」など，メリットを感じられる呼びかけを行う。

学校関係者評価	<div>学校関係者による意見・支援策</div> <ul style="list-style-type: none"> ・本校児童生徒は、全国平均・京都市平均に比べて、体力的にどうだろうか、気になる。比較できる資料等あればありがたい。 ・Ⅲ期の生活リズムの崩れが、顕著に現れている。親として、指導も含め家庭でのリズム作りを心がけていきたい。
---------	---

（４）学校独自の取組

重点目標	<p>「目標に向け自ら学び、よく考え、進んで実行する子」</p> <p>「自然を愛し、郷土を愛し、人を愛する子」</p> <p>「心豊かに、集団や社会の中でたくましく生きていく子」</p> <p>「誰に対しても、思いやりをもって接することができる子」</p>
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・「期の会（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの３つの期ごとの担当者による会議）」を核とする「期」の取組のより一層の充実を図る。 ・「つきたい力を明確にした『言語活動』」に焦点化した９年間を見通したカリキュラムを編成する。 ・本校の特色ある教育活動としての「ことば学習」「花背学習」「金管バンド」「スキー学習」「そろばん学習」等を継続して実施していくとともに、それぞれがより深化できるように、他校・他地域との交流を推進する。 ・９学年の異年齢集団による縦割り活動の取組を通して、自他の持つよさに気付き、互いに支え合い高め合う集団づくりを推進する。 ・理論研修等を実施し、義務教育学校として９年間を見通した教育に対する全教職員の理解の深化を図る。 ・花背地域ならではの自然・歴史・人について主体的・対話的に深く学ぶため、地域・家庭と連携し、地域内の校外学習の実施やゲストティーチャーの活用等をすすめていく。
（取組結果を検証する）各種指標	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の話す・聞く態度や学習態度の変容。 ・授業参観，家庭訪問，懇談会等の際の保護者の意見。 ・児童生徒，教職員及び保護者アンケートの結果。 <p>該当項目…花背学習や行事等を通して地域のことをよく学んでいる。（児生・教・保）</p> <p>縦割り活動に積極的に取り組んでいる。（児生・教・保）</p> <p>学校であったことなどを家でよく話している。（児生・教・保）</p> <p>※児童生徒は自己の取組について振り返り評価し，教師は児童生徒に対する指導度・実現度について評価し，保護者は子の様子について評価する。</p>

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒アンケートでは、「⑬行事などの際縦割り活動に積極的に取り組んでいる。」の項目で、第１回と比べ第２回の全校平均が下がった。 ・教職員アンケートでは、「⑭-１ 学校や学級の教育方針を保護者に伝えている。」「⑭-２ 児童生徒が気軽に質問や相談ができるような接し方をしている。」の２つの項目で、第１回と比べ第２回の実
--------------------	--

<p>現度の平均値が上がった。</p> <p>・保護者アンケートでは、「⑬学校の様子を家でよく話している。」の項目で、第１回と比べ第２回の「できていない」が増えた。</p>	
自己評価	<p>分析（成果○と課題▼）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>▼「行事などの際縦割り活動に積極的に取り組んでいる。」が下がっているのは、おそらくアンケートを取る時期が関係しているのではないかと考えられる。</p> <p>▼新型コロナウイルス感染拡大の影響もあって、本校独自の取組が十分にできていない面がある。</p> <p>▼新しく着任した教職員は、「花背学習」の題材選びに悩むことが多い。</p> <p>▼後期課程の「花背学習」の題材は、卒業生が過去に行ったものをさらに高める（深める）といった内容でも良いのではないかと考える。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな行事での取組だけでなく、RT（レインボータイム）を利用した継続した取組を意図的に設ける必要がある。 ・コロナ禍でここ２年間はイレギュラーな部分があった。コロナ禍という制約のある中で、学校教育目標に迫る手立てを再考する必要がある。 ・過去の単元配列表や「総合的な学習の時間」に指導した資料があるので、年度初めに計画を立てる際の参考資料として周知する。 ・「花背学習」の実践事例を、新着任の教職員にしっかりと引き継げるように整理しておく。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと地域の先生（私たち）を利用してほしい。 ・スキー学習について。学校グラウンド西側斜面を利用するのはどうか。過去に斜面を利用し、グラウンドをゲレンデ等として、スキー・ソリ等、各期で活動場所としていた。広河原スキー場が前途不透明ならば、一度考慮の余地があると思う。 ・「⑫花背学習や行事等を通して地域のことをよく学んでいる。」に対して、Ⅲ期が低いのが気になる。

（５）教職員の働き方改革について

<p>重点目標</p> <p>教職員一人一人が勤務時間を意識し、子どもと向き合う時間を十分に確保する。</p>
<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的・実施内容・実施時期等について見直し、学校行事を精選する。 ・計画的な運営を通して、会議・研修会等を精選、効率化する。 ・年休等を取得しやすいように学校体制で時間割等に柔軟に対応する。
<p>（取組結果を検証する）各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の勤務時間。

- ・年休取得率。

最終評価

<div>（中間評価時に設定した）各種指標結果</div> <ul style="list-style-type: none"> ・「時間外勤務が45時間以上」である人数は、管理職を含めて毎月1人と減った。 	
自己評価	<div>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</div> <p>○ICT支援員を有効活用することで、積極的にICT機器を使用する教職員が増えた。</p> <p>▼新型コロナウイルス感染拡大の影響で、教職員が出勤できなくなるケースがいくつもあった。その都度、授業の差し替えや代行、業務上の再分担などが必要になり、負担が増える場面があった。</p>
	<div>分析を踏まえた取組の改善</div> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続きICT支援員を活用していく。 ・変更などについては可能な限り早めに提示し、万が一の“想定”と“心づもり”をお願いする。
学校関係者評価	<div>学校関係者による意見・支援策</div> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の負担が軽減される取組をがんばってほしい。 ・へき地校の教職員として、地域を理解し、地域を愛し、子どもたちを愛する考えに立った研修をお願いしたい。 ・教職員の働き方に関しては、かなり偏りがあるように感じる（夏休みの部活指導も含む）。退勤時間が遅い方なるべく早く帰れるようになればいいと思う。

（6）いじめの防止等についての取組に向けて

<div>重点目標</div> <p>すべての児童生徒が安心・安全のもと楽しく豊かな学校生活を送り、主体性と社会性を身につけ、自らの可能性を伸長できるようにする</p>
<div>具体的な取組</div> <p>「学校いじめの防止等基本方針」に同じ</p>
<div>（取組結果を検証する）各種指標</div> <ol style="list-style-type: none"> ①全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。 ②学校のいじめ対策委員会のメンバーを児童生徒に紹介している。 ③「友だちからされたことでいやな思いをしたことがあるか（その内容も）」、また「友だちがされているのを見たことがあるか（その内容も）」について、児童生徒から確実に聞き取れている。 ④児童生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を共有している。 ⑤保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している。

最終評価

<div>（中間評価時に設定した）各種指標結果</div> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員アンケートでは、「⑬学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応につとめている。」「⑭児童生徒・保護者の訴えや相談内容を教職員の間で共有している。」の項目で、どちら
--

も第1回に続き第2回も高い実現度となった。

自己
評価

分析（成果○と課題▼）、重点目標の達成状況、次年度の課題

○未然防止のために、「子どもの自尊感情や自己有用感を高める指導の大切さ」「組織内の連携の大切さ」等について、全体で確認できた。

○第2回いじめアンケートの結果を、学級経営および教育相談へ活用することができた。

○様々な場面で子どもと接する教職員が多いので、事前にいろいろな情報を共有することで、個々に対する観察が深まった。

▼今は誰もが新型コロナウイルスに感染してもおかしくない状況である。感染した人に対する偏見を持たないように、継続した指導、見取りを行う必要がある。

分析を踏まえた取組の改善

・事案が起こる前から調査・情報共有を行う中で指導体制を一本化し、義務教育学校の実態に即した指導体制の整備を、引き続き行っていく。

学校
関係
者
評価

学校関係者による意見・支援策

・日頃から、子どもたちの言動をよく見てあげてほしい。

・この項目は、教師の児童生徒と関わる力が試される部分。教師個人の技量にとどまらず学校全体で同じ指導ができるようになると、さらに素晴らしい学校になると思う。